

大坂干鯛屋近江屋市兵衛の経営（三）

白川部 達夫

はじめに

本稿では、慶応期より明治一〇年代の大坂干鯛屋近江屋市兵衛の経営について検討する。近江屋市兵衛家は、文政末年頃、近江屋長兵衛家から分家し、文政・天保初年には阿波への干鯛販売などを積極的に展開したが、二代目市兵衛が天保一三年頃死去したため、幼少の子供は本家近江屋長兵衛家に引き取られ、商売は中断した。^①

安政二年（一八五五）、三代目市兵衛が経営を再開したが、これが後に大阪の経済界をリードした田中市兵衛であった。簡単に、田中市兵衛の業績を紹介しておく、干鯛屋を再興した市兵衛は、たちまち頭角を現し、明治六年（一八七三）には肥物商組合結成の惣代となり、^②また北海道産物商社設立にも加わった。^③明治一〇年（一八七七）には、第四十二国立銀行の設立に尽力して、その頭取となった。^④明治一四年（一八八一）には、五代友厚らが設立した関西貿易会社に関連して北海道に渡った。五代が北海道開拓使の官有物払い下げを受けて交易を行おうとし、その視察のためであった。しかしこれは同年、払い下げ反対運動が起きて、中止となった（北海道開拓使官有物払い下げ事件）。明治一七年（一八八四）に、神戸棧橋株式会社が発足すると、その相談役、やがて社長となって貿易の振興に努めた。また明治

一八年（一八八五）には、阪堺鉄道の設立、さらに山陽、九州以下大阪に関連する鉄道の創立に関連した。他にも日本生命以下多くの会社の設立にかかわっている。明治二七年（一八九四）には大阪商船会社の監査役、同二八年には社長となり、同社の基礎を固めた。第四十二銀行の経営と大阪商船会社が田中の大阪財界での基盤となったといわれる。明治二一年（一八八八）には、第三代大阪商業会議所会頭（後、大阪商工会議所）となった。その後、日本綿花の創業にかかわり、明治二八年（一八九五）に社長となったが、経営は不振で挽回できないまま、相場に失敗して財界から引退し、明治四三年（一九一〇）に亡くなった。

田中は家業の肥料商として頭角を現し、大阪肥料取引所理事長にもなった。しかしその本領は、大阪の急激な近代化のなかで各種会社の創立と運営にかかわり、経営者として優れた手腕を發揮していったところにあった。このため肥料商としては、仲買問屋にとどまり、大規模化はしなかったようである。

ここでは慶応期から明治一〇年代の仕入れ状況を分析して、当該期の大阪干鰯屋の動向を明らかにしたい。なお地名については、慶応三年（一八六七）を含むが煩雑さを避けるため大阪・東京の表記を統一して使うことにする。

一 慶応三年～明治六年の買付け状況

表1に、慶応三年（一八六七）から明治六年（一八七三）までの仕入れ状況を示した。⁵⁾

買付け銀高から見えていくと、慶応三年（一八六七）の銀六九八貫目を初めとして、明治三年（一八七〇）の三二九八貫目まで急速に仕入れが拡大し、明治四年（一八七二）にやや停滞するものの、明治五年（一八七二）には四〇五一貫目、明治六年（一八七三）には三八四〇貫目になっている。この頃が、帳簿で確認できる近江屋市兵衛家の買付けのピー

明治3年			明治4年			明治5年			明治6年		
俵	貫目(貫)	代銀(匁)	俵	貫目(貫)	代銀(匁)	俵	貫目(貫)	代銀(匁)	俵	貫目(貫)	代銀(匁)
			520		19,669				300 399		18,000 49,497
			453		50,451	535	2,595	58,641		1,601	16,412
	1,774	53,430		651	12,203		39,304	434,865		8,791	109,384
	512	16,263		120	2,520		242	3,264		2,678	36,282
	6,083	138,154		1,985	41,986		664	7,587		551	8,873
	785	18,162					59	1,160			
500玉		18,500									
	898	25,186	453	2,240	35,276		240	2,470		3,752	48,382
500玉	10,052	269,695		4,996	142,436		43,104	507,988		17,373	219,333
										2,475	18,312
				470	8,109		72,342	819,590		67,813	821,829
	39,917	1,127,067		32,751	644,648		22,124	590,459		77,435	897,565
	8,689	197,882		9,618	182,323		2,414	31,368		994	12,677
	736	20,614					563	11,135		116	2,749
	5,962	163,960		10,192	203,870		94,368	907,929		968	2,821
	55,304	1,509,523		53,031	1,038,949		192,078	2,362,354		968	151,654
						100		2,400		64	985
	176	4,719		1,053	21,060		29,632	293,808		13,996	165,586
	9,480	289,035		8,109	183,155		1,909	19,175			
	6,867	152,039		6,703	119,055		4,252	46,343			
	3,133	92,818		1,121	26,131						
	5,056	133,650				1,868	61	34,655		246/557玉	19,121
										152/271玉	17,318
	24,712	672,261		16,987	349,402		35,854	396,381		398/828玉	14,060
	89	1,334	47		3,795		14,046	125,233		31,057	401,142
	9,441	69,891		3,816	70,063		26,835	282,796		39,591	474,494
	4,846	271,119					10,791	149,374		17,376	229,616
	6,461	229,317		4,603	91,317		1,042	9,062		4,269	55,934
										788	17,014
			200玉		6,250					50玉	1,831
1,000		151,069	1,000		98,975	100		5,263		750	73,392
	4,640	124,527	175	2,990	79,656	10	29,847	207,360		35/328玉	11,857
1,000	25,476	847,256	1222/200玉	11,409	350,056		82,871	785,136		785/378玉	104,938
	89	1,334	1,020		73,915	635	14,314	188,148	300	33,596	454,852
		128,040		5,990	111,434		168,112	1,831,059		130,190	1,571,292
	54,754	1,703,483		40,980	830,323		35,066	762,272		97,489	1,163,463
	28,100	717,392		22,909	434,682		8,371	94,359		5,815	77,484
	4,655	131,594		1,121	26,131			932		904	19,763
500玉		18,500	200玉		6,250					246/607玉	20,952
1,000		151,069	1,000		98,975	100		5,263		750	73,392
	16,556	447,323	175	15,422	318,802	1,878	124,517	1,152,414		1554/599玉	18,429
1000/500玉	104,153	3,298,735	2195/200玉	86,422	1,900,512		2,613	351,312	4,051,858	2850/1206玉	286,424
											3,840,771

鯛買日記」、大阪大学経済史経営史資料室所管、田中市兵衛家文書、明治6年11月「千鯛買日記」。

表1 慶應・明治初期の仕入れ状況

場所	仲間	品目	慶應3年			明治元年			明治2年		
			俵	貫目(貫)	代銀(匁)	俵	貫目(貫)	代銀(匁)	俵	貫目(貫)	代銀(匁)
江戸	干鯛 問屋	干鯛 その他		1,411	47,967						
大坂	仲買	干鯛	724		93,178		48	719			
		メ粕		486	18,363				7,899	240,324	
		鯉粕	1,494		45,205	2,323		48,547	4,644	155,350	
		羽鯉							588	24,573	
		数子・白子				148		5,260	1,818	93,443	
	種粕・玉粕				500玉		15,000	430玉		12,360	
	その他	1,605		46,034	2,060		46,865	1,353		33,846	
	小計		3,585		202,780	4,579		116,390	430玉	16,301	559,896
	松前・ 荷受・ 商社	干鯛					494	7,762			
		メ粕	4,664		110,390						
鯉粕		76		2,192	36,017		729,462	6,891		277,759	
羽鯉		953		31,457				906		51,717	
数子・白子		1,837		31,232	7,171		185,441				
その他	1,366		35,620	22,785		156,891	2010本	16,025	693,074		
小計		8,896		210,892	66,468		1,079,556	2010本	23,822	1,022,550	
その他	干鯛					1,315	19,070	229		49,356	
	メ粕		26	576							
	鯉粕										
	羽鯉										
	数子・白子					3,660	118,136				
種粕・玉粕					1,587	23,623	210玉		6,700		
その他	26		576	78/58.2石	2,226	117,584	38/2本/20石		23,751		
小計		52	1,153		8,788	278,414	267/210玉/2本/20石		79,807		
不明	干鯛		22	924	204		16,799				
	メ粕	2	1,641	39,747							
	鯉粕		2,810	57,285				4,123	142,446		
	羽鯉							1,777	34,434		
	数子・白子		295	7,660		26	645	65	1,620		
	種粕・玉粕		5,699	99,740				500玉		25,250	
	糠							1,700		165,661	
	その他	91	1,120	30,093		1,039	24,929	258.5/5本	65	11,217	
小計		11,587	235,447		1,065	42,373	1958.5/500玉/5本	6,030	380,627		
小計	干鯛	724	22	94,102	200	1,810	44,350	229		49,356	
	メ粕	2	7,742	169,076					8,075	240,324	
	鯉粕	4,380		104,682	38,340		778,008	15,657		575,555	
	羽鯉	953		31,457				3,271		110,724	
	数子・白子	2,132		38,892	11,004		309,482	1,882		95,063	
	種粕・玉粕	5,699		99,740	500玉	1,587	38,623	1,140玉	16,025	44,310	
	糠							1,700		165,661	
	その他	91	5,528	160,291	78/58.2石	28,110	346,269	296.5/2017本/20石	17,443	761,888	
合計		735	26,457	698,239	278/58.2石/500玉	80,852	1,516,732	2225.5/1140玉/2017本/20石	62,354	2,042,881	

出典：東洋大学井上門了記念博物館所蔵・近江屋市兵衛家文書45番、慶應3年正月「干鯛買日記」、50番明治5年正月「干

表2 慶応・明治初年の買付先の比重 (%)

分類	慶応3年	明治元年	明治2年	明治3年	明治4年	明治5年	明治6年
東京問屋	6.9				1.0		1.8
仲間	29.0	7.7	27.4	8.2	7.5	12.5	5.7
松前・荷受	30.2	71.2	50.1	45.8	54.7	58.3	50.6
その他	0.2	18.4	3.9	20.4	18.4	9.8	5.3
不明	33.7	2.8	18.6	25.7	18.4	19.4	36.7
合計	100.0	100.1	100.0	100.1	100.0	100.0	100.1

出典：表1に同じ。

クであった。この間、万延改鑄にもなう物価騰貴があり、幣制の混乱もあったので、一概にはいえないが、買付け重量合計でも銀高に並行して増加の趨勢にあり、取引が拡大していたことはいえる。

幣制について簡単に説明しておく⁽⁶⁾、万延改鑄後、西国では銀貨が下落し、明治元年（一八六八）には近江屋の帳簿で金一兩に銀二九匁六分までになった⁽⁷⁾。こうしたなかで新政府は同年五月に銀目停止を命じて、上方の銀遣いを禁止した。その後、混乱がやや収まり、金一兩に銀一〇〇匁で換算することになったので、ここでは金建で書かれている場合は、明治元年（一八六八）は近江屋の基準にしたがい、明治二年（一八六九）からは金一兩銀一〇〇匁で銀に換算した。また近江屋では明治七年（一八七四）から円計算が基準となった。政府は金一兩は一円と定めたので、一円は銀一〇〇匁とされた。ここでもこれにしたがって計算している。

買付け先については、表2に東京干鯛問屋、干鯛屋仲間、松前問屋および荷受問屋と商社、その他、不明と分けて、取扱銀高とその比重を示した。

江戸問屋との取引は、この時期ほとんど見られない。慶応三年（一八六七）は身欠き鯡を東京干鯛問屋の喜多村富之助から購入しているが、喜多村は大阪に本店をもっていたので、そこからの購入であったと考えられる⁽⁸⁾。明治四年（一八七一）は同じく和泉屋三郎兵衛から干鯛五二〇俵を購入し、明治六年（一八七三）は喜多村富之助から鹿島秋引き干鯛三〇〇俵と相州小麦二九九俵、南部大豆一〇〇俵が買付けられている。明治四

年、同六年は、東京から送られたものであったといえるが、全体に東京問屋からの買付けは多くはなかった。近江屋の「干鯛買日記」の記載対象は、自らの買い荷だけで、東京干鯛問屋の送り荷は含まれなかったのではないかと考えられる。

大阪の干鯛屋仲間との取引は、慶応三年（一八六七）と明治二年（一八六九）が三〇パーセントに近く高い比率を占めた以外は、全体に低調となっていた。ただ不明のなかに干鯛屋仲間の屋号や名前に近似するものが相当数いるので、これを見込むとそれなりの数字にはなったと考えられる。明治元年（一八六八）に新政府は、函館生産会所を設立して、干鯛屋仲間を廃した。仲間は再三その存続を願い出て、函館産物売捌人の名義を与えられた。その後、明治六年（一八七三）に肥物商組合結成を願い出て認められている。^⑨この間、干鯛屋仲間の地位は不安定であったが、文久元年（一八六一）の仲間名簿と明治六年（一八七三）の組合結成願いの間に、新たに加わったらしいものもある程度で、全体に変化は少なかったと見られる。^⑩

松前問屋、荷受問屋などは近江屋の買付けの中心となった。通常では買付銀高の五〇パーセント程度で、多いときは七〇パーセントに及んだ。近世では、北海道産品は松前問屋が取扱い、これを干鯛屋仲間（松前東組）が仲買して小売へ販売した。しかし明治二年（一八六九）に北海道産物商社が結成されて五常組と称し、翌年北海道産物商社稲花組が設立された。明治五年（一八七二）には両者が合併して第一北海道産物商社となったが、短期で解散した。その後、明治一二年（一八七九）には、荷受問屋一番組ができて、干鯛屋でも問屋的性格が強かったものが参加して松前問屋に代わる問屋として再編された。^⑪

近江屋の取引は、慶応三年（一八六七）、明治元年（一八六八）は、すべて近世の松前問屋が相手であった。松前問屋では木屋市兵衛、菊屋利助、近江屋惣七、越後屋助七、和泉屋市兵衛、布屋和助、新保屋吉治郎、近江屋熊蔵、島屋重治郎、金沢仁作らからの買付けが行われている。また商社では、明治二年（一八六九）から五常組、稲花組、北海道

社、加島屋商会などとの取引が行われた。

その他では主として大阪市中や近郊のものが中心となっている。比重がもっとも高かったのは明治三年（一八七〇）の二〇・四パーセントで、明治二年、同四年が一八パーセント台となりこれに近かった。この取引は木屋与兵衛とのものが中心であった。同人は越中高岡の綿場に買次人の申請をして認められたもので、買次だった木屋市郎兵衛支配だったとされる。越中高岡には幕末・明治前半に隆盛となった同国新川木綿の原料となる繰綿を大阪から仕入れる問屋があり、その買次にあたった大阪綿問屋の一人であった。木屋は、帰り荷として鱒粕・羽鱒などを大阪へ運び販売していたようである¹²。木屋市郎兵衛は荷受問屋一番組にも木谷市郎兵衛として名前が見えるので、その関係で肥料売買にも参加したのである¹³。ほかの年は泉州大津、佐野、箱作や和歌山、宇和島の肥料商、摂津西成郡野里村のものなどからの買付けであった。ことに宇和島問屋小堀喜之助からは宇和粕などを仕入れていた。関東粕の入荷が低迷しているなかで、近江屋は宇和粕（鱒メ粕）を買付けていたことがわかる。大阪肥料市場は安政期から鱒粕など北海道産品が中心となり、価格も低下したので、佐伯・宇和など西国物などは、価格競争に敗れたという指摘もあるが、関東干鱒・メ粕の低迷のなかで、西国物を導入しようとする動きもあつたことを示している。地域により干鱒・メ粕の需要も根強くあつたため、近江屋も仕入れに努力していたといえよう。

不明は、所在の不明な人物との取引を記載している。慶応三年（一八六七）、明治六年（一八七三）のように三〇パーセントを超える年もある。和泉屋七兵衛、同善助、同宇吉、同豊吉、近江屋喜兵衛、同五助、平野屋専蔵、兵庫屋清次郎、鷺屋与七らは干鱒屋仲間にも屋号があるが、残された名簿と名前が完全に一致しないというものである。ことに幕末から明治六年（一八七三）まで名簿が欠けているので、この間の名義変更で対照できなくなったものの可能性が高い。したがって名前を対照できるようになれば、仲間の比率はもっと高くなることが予想される。不明のなかで特徴的なのは、

表3 明治初期の買付品目の比重

品目	慶應3年	明治元年	明治2年	明治3年	明治4年	明治5年	明治6年
干鰯	13.5	2.9	2.4	0.0	3.9	4.6	11.8
メ粕	24.2	0.0	11.8	3.9	5.9	45.2	40.9
鯡粕	15.0	51.3	28.2	51.6	43.7	18.8	30.3
羽鯡	4.5	0.0	5.4	21.8	22.9	2.3	2.0
数子・白子	5.6	20.4	4.7	4.0	1.4	0.5	0.5
種粕・玉粕	14.3	2.6	2.2	0.6	0.3	0.0	0.6
糠	0.0	0.0	8.1	4.6	5.2	0.1	1.9
その他	23.0	22.8	37.3	13.6	16.8	28.4	12.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出典：表1に同じ。

糠の取引が明治三年（一八七〇）から播磨屋清兵衛、同万一郎、八幡屋利兵衛らと行われたことである。糠は、堺に江戸積包糠問屋があり、明治元年（一八六八）の記録には、播磨屋万之助が仲間名としてあがっている^⑤。この播磨屋万一郎もその関連者ではなかったかと考えられる。

少し重なるところもあるが、つぎに表3によって取引品目について検討しよう。

干鰯は慶應三年以降、明治六年（一八七三）まで低迷している。東京干鰯問屋との取引は、近江屋の直接買付けではなく、送り荷が中心であったようでは現れない。慶應三年（一八六七）では、干鰯屋仲間柴屋嘉介、志方屋伊兵衛、近江屋千助から房総半島南部の本場干鰯七二四俵を購入している。また明治六年（一八七三）は、加島屋商会の宇和干鰯と東京問屋の喜多村からの買付けが中心で、その他に地廻りと称される大阪湾周辺のものであった。

メ粕は鰯メ粕に限定しているが、慶應三年（一八六七）、明治五、六年が高い比率を占めた。慶應三年（一八六七）はタルマイ鰯粕が中心で、その後、宇和粕が中心となった。明治五、六年では、北海商社、加島商社などから大量に購入している。

鯡粕・羽鯡は全体の比重が高く、明治三年（一八七〇）には合計して七三パーセントにもなった。その他のなかにはオタルナイ、唐太、アツタ、タルマイなど

北海道の生産地名だけで呼ばれている品物があり、鯡粕の可能性が高いので、これが入ると比重が高くなる。しかしタ
ルマイなど鰯粕生産が行われているところもあり、確定できないので、ここでは不明にしてある。明治二年（一八六九）
などは、こうしたものが多いので、実際には比重はもっと高くなると見られる。いっぽう明治五、六年は宇和粕の購入
が大きかったため、比重が低下したようである。

数子・白子は、比重は低くなるものの、一定数購入されている。

最後に、種粕・玉粕と糠であるが、近江屋は干鰯屋仲間であり、魚肥が商売の中心だったので、近世にはほとんど取
引がなかった品物である。これが明治になると一定の比重で買われるようになる。流通組織が魚肥とは違うのでよくわ
からない面があるが、糠は堺に西国物が集荷され、そこから江戸に送られていた。これにかかわるものからの購入であっ
た可能性がある。

二 明治七年より明治一〇年代の買付の動向

明治七年（一八七四）から近江屋の帳面は円建てが中心となる。ここでは明治六年「干鰯買日記」によって検討を加
えたい。¹⁶本帳面は、明治六年（一八七三）一月からの記載であるが、この年はわずかしき記録がなく、実質的には明
治七年（一八七四）正月からといってよい。このため明治六年分は、前項に移して計算している。表4-1、2によっ
て全体の動向を見ると、明治七年（一八七四）は、買付高三万五〇〇〇円余となっている。一円は銀一〇〇匁に換算
されるので、銀にすると三五〇〇貫目余となる。明治六年（一八七三）から比べると若干、買付けが少なくなってい
る。明治八年（一八七五）には、三万三〇〇〇円とさらに低下し、明治九年（一八七六）には八〇〇〇円台となった。

明治10年			明治11年			明治12年		
依	貫目(貫)	代金(円)	依	貫目(貫)	代金(円)	依	貫目(貫)	代金(円)
	1,899	222		58	12		1,384	348
							29	5
	1,899	222		58	12		1,413	353
	18,520	3,000	2,000		634			
	43,513	6,534		750	147		60	14
	842	127						
	62,876	9,662		750	781		60	14
	9,970	1,167						
1,109	15	2,101				860		2,372
	9,985	3,268						2,372
				600	120		123	31
							362	80
	58	7						
	58	7		600	120		485	110
	18,520	3,000	2,000		634			
	55,382	7,923		1,408	278		1,567	392
							362	80
1,109	915	2,235				860	29	2,378
1,109	74,817	13,159	2,000	1,408	912	860	1,958	2,849

表 4-1 明治10年代前後の仕入れ状況

場所	仲間	品目	明治7年		明治8年		明治9年		
			俵	貫目(貫) 代金(円)	俵	貫目(貫) 代金(円)	俵	貫目(貫) 代金(円)	
東京	干鯛問屋	干鯛							
大阪	仲買	干鯛		6,771 850			105	177	36
		メ粕		467 113	2,341	860		29	5
		鱈粕		4,673 896	4,677	844			
		羽鱈		4,919 973	4,852	873			
		数子・白子		80 24	984	175			
		種粕	300玉	101			500玉		134
	その他		4,456 789	1,361	197				
	小計		300玉 21,367 3,745	14,215	2,950	105/500玉	206	175	
	荷受・商社	干鯛		5,346 850	4,107	646			
		メ粕		1,258 258	1,096	244			
鱈粕			29,994 6,072	50,022	9,090	9,251	1,091		
羽鱈			22 4	21,234	2,845	8,262	1,029		
数子・白子				2,683	448	5,337	609		
種粕		700玉	19,589 4,406	6,970	14,756	200玉		54	
その他		65,385 11,042	5,079	741	200	38	433		
小計		700玉 121,594 22,632	91,192	28,771	200/200玉	22,889	3,215		
その他	干鯛				201	47			
	メ粕						4,567	582	
	鱈粕								
	羽鱈		639 81						
	数子・白子						4,484	476	
	種粕	1191玉	304			1250玉		303	
糠					250		171		
その他	14/35玉	366 130			125/250箇		590		
小計		1205/35玉 1,005 515	201	47	375/1250玉 /250箇	9,051	2,123		
不明	干鯛		233 132						
	メ粕		296 50						
	鱈粕		13,884 2,381	2,467	408	13,254	1,852		
	羽鱈		8,999 1,192	5,580	847	150	15		
	数子・白子		839 197			215	31		
	種粕	3750玉	1,366						
糠	1,050	807			875		609		
その他	869	12,048 2,314	19	51					
小計		1919/3750玉 36,067 8,438	8,048	1,305	875	13,619	2,506		
小計	干鯛		233 12,117 1,832	4,107	646	105	177	36	
	メ粕		2,021 421	3,638	1,151		29	5	
	鱈粕		48,551 9,349	57,167	10,342	27,073	3,526		
	羽鱈		14,579 2,250	31,667	4,566	8,412	1,043		
	数子・白子		920 221	3,668	623	10,036	1,115		
	種粕	5941玉	6,175	6,970	14,756	1950玉		491	
	糠	1,050	807			1,125		780	
	その他	869/35玉	82,256 14,274	19	6,440 989	325/250箇	38	1,024	
合計		1102/5976玉 160,444 35,329	19	113,656 33,072	1556/1950玉 /250箇	45,765	8,019		

出典：大阪大学経済史経営史史料室所管・近江屋市兵衛家文書、明治6年11月「干鯛買日記」。

明治16年			明治17年			明治18年		
俵	貫目(貫)	代金(円)	俵	貫目(貫)	代金(円)	俵	貫目(貫)	代金(円)
				453	55			
				2,685	354			
	8,181	1,272					766	97
20石		259					565	55
	8,181	1,531		3,138	410		1,331	152
	6,565	853						
	5,501	922		3,601	468		39,796	5,698
	155	28					164	22
							1,990	291
	12,220	1,803		3,601	468		41,950	6,010
	3,312	553						
	3,312	553						
	23,433	4,916		15,646	2,103			
	10,133	1,289						
				53,047	7,161			
	33,565	6,205		68,693	9,264			
	6,565	853		453	55			
				2,685	354			
	40,427	7,663		19,247	2,571		40,562	5,795
	10,287	1,317					164	22
							1,990	291
		259		53,047	7,161		565	55
20石	57,279	10,092		75,431	10,142		43,281	6,162

表4-2 明治10年代前後の仕入れ状況

場所	仲間	品目	明治13年			明治14年			明治15年		
			俵	貫目(貫)	代金(円)	俵	貫目(貫)	代金(円)	俵	貫目(貫)	代金(円)
東京	干鰯問屋	干鰯	759	4,422	2,075	809	1,050				
大阪	仲買	干鰯		391	67						
		鰯粕									
		鯉粕		90	26						
		羽鯉									
	数子・白子										
		種粕									
		その他									
		小計		481	92						
	荷受・ 商社	干鰯									
		鰯粕		2,541	790	18,779	4,226	73,575	16,704		
		鯉粕				2,240	464				
		羽鯉									
		数子・白子									
		種粕						166	294		
		その他									
		小計		2,541	790	21,019	4,690	73,575	16,998		
	その他	干鰯									
		鰯粕						4,423	986		
		鯉粕									
		羽鯉									
		数子・白子									
		種粕									
		糠				82.4石	276	18,957	3,830		
		その他									
		小計					276	23,380	4,816		
	不明	干鰯					22	5	177	33	
		鰯粕		3,236	1,044		5,244	1,046			
		鯉粕		377	117		1,113	245	15,309	3,326	
		羽鯉									
		数子・白子		484	177						
		種粕					300	327			
		糠				515	125	764			
		その他									
		小計		4,098	1,337		6,504	2,387	15,486	3,359	
	小計	干鰯	759	391	2,141		22	1,055	177	33	
		鰯粕		3,236	1,044		5,244	1,046			
		鯉粕		3,008	932		19,891	4,471	93,307	21,016	
		羽鯉		0	0		2,240	464			
		数子・白子		484	177						
		種粕					300	327			
		糠							166	18,957	
		その他					125	1,041		4,124	
	合計		759	7,120	4,294		27,522	8,403	166	112,441	
										25,173	

出典：大阪大学経済史経営史史料室所管・近江屋市兵衛家文書、明治6年11月「干鰯買日記」。

表5 明治10年代前後の買付先の比重 (%)

関係	明治7年	明治8年	明治9年	明治10年	明治11年	明治12年	明治13年	明治14年	明治15年	明治16年	明治17年	明治18年	明治11年～同18年
東京問屋							48.3	12.5					4.6
仲買	10.6	8.9	2.2	1.7	1.3	12.4	2.2	0.0	0.0	15.2	4.0	2.5	3.8
荷受・商社	64.1	87.0	40.1	73.4	85.6	0.5	18.4	55.8	67.5	17.9	4.6	97.5	46.4
その他	1.4	0.1	26.5	24.8	0.0	83.3	0.0	3.3	19.1	5.5	0.0	0.0	11.8
不明	23.9	4.0	31.3	0.1	13.2	3.9	31.1	28.4	13.3	61.5	91.3	0.0	33.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出典：表4に同じ。

明治一〇年（一八七七）は再び一万三〇〇〇円台に回復するが、翌一一年には九〇〇〇円と最低となる。明治一二年（一八七九）から回復して明治一五年（一八八二）には二万五〇〇〇円になるが、その後も、明治一八年（一八八五）までそれほど増加していない。

表に現した動向は以上のようなものであるが、この「干鯛買日記」は、明治一〇年（一八七七）までは、日付を追っており、年度の変わり目にもその旨、記載がある。その点で不自然なところは無いが、以降は、年度の変わり目も明記されず、いきなり七月から買付けの記載が現れたりする。このため年度の切れ目が定めがたい部分がある。一応、記載から判断して、このように切れ目を定めてみたが、完全なものではない。明治七、八年頃から荷受問屋の業務に展開していったため、この帳簿に記載されなくなった可能性もあり、販売史料の分析を含めて今後検討の必要がある。

表5に買付けの相手ごとの合計と代金の比重を示した。年度の切れ目がはっきりしないため、明治一一年～同一八年については、それらの合計と比重も示した。

東京は明治一三年（一八八〇）に干鯛問屋喜多村富之助より本場・鹿島干鯛を七五九俵と重さ四四二二貫目余、翌年は本場干鯛八〇九俵を購入していた。明治一四年（一八八一）には青木勘兵衛殿分とあって、喜多村が青木勘兵衛から販売を依頼され、近江屋へ送ったものであることがわかる。

仲買との取引は一〇パーセント以下のことがほとんどで、補助的なものだったことが

わかる。明治初年以來、干鯛屋の再編で、仲買と荷受問屋との区別も進んでいたと考えられる。

荷受問屋・商社などがこの時期、近江屋の買付けの中心であった。明治九年（一八七六）に、比重が四〇パーセントと大きく下がるのは、その他と不明で買付けがあったため、そちらの比重が高まったからである。取引相手は、片山和助、金沢仁作、北海道社、島屋重次郎、藤本太四郎、藤野熊蔵、木谷与市郎、新保吉治郎、今井勢兵衛、大一商社（第一北海道産物会社カ）、宇和島の小堀喜之助、大三輪与一郎、千成社、栖原幸吉などで、明治一五年（一八八二）には三井物産との取引も行われた。明治一一年〜明治一八年までの合計では、全体の四六パーセントを維持しており、買付けの中心であったことがわかる。

その他は、明治九年（一八七六）、同一〇年、同一五年に二〇パーセント前後の比重を占めたが、外はそれほど、大きな取引はなかった。明治九年（一八七六）は、尾張常滑の山本林兵衛から浮子一九〇俵、大阪の杉村正太郎から種粕一二五〇俵を購入したことが比重を高めた要因であった。¹⁷杉村正太郎は、大坂で錫屋両替商を営み、明治前半には五代友厚らと関西貿易社を結成、その社長となり、神戸棧橋会社にも参画した有力商人であった。市兵衛とは親しい関係であった。市兵衛の母の実家は近江屋側の記録では、錫屋であったことがわかるので、その実家の可能性もある。¹⁸万延元年（一八六〇）には、錫屋正太郎名義で、魚肥を近江屋から購入しているので、肥料小売も行っていたようである。また明治一〇年（一八七七）は安治川西村久太郎から九州米一一〇九俵を買っていることが大きかった。明治一五年（一八八二）には徳島の松本五郎、久住九平から北海道産のメ粕を八〇〇俵購入している。久住は、近世では阿波藩の干鯛平問屋一二名の一人であった。¹⁹このように従来なかった買付けが行われていることがわかる。

不明は、明治七年（一八七四）、同九年、同一二年、同一四年、同一六年、同一七年と比重が高くなる年が多い。明治一二年以降は、買付けの絶対量が少ないなかの比重なので、どこまで評価してよいか問題もある。しかし明治一二年

表6 明治10年代前後の買付品目の動向

品目	明治7年	明治8年	明治9年	明治10年	明治11年	明治12年	明治13年	明治14年	明治15年	明治16年	明治17年	明治18年	明治11年 ～同18年
干鰯	5.2	2.0	0.4		69.5		49.9	12.6	0.1	8.5	0.5		7.0
メ粕	1.2	3.5	0.1	22.8			24.3	12.5			3.5		3.6
鱈粕	26.4	31.3	44.0	60.2	30.5	13.8	21.7	53.2	83.5	75.9	25.4	94.0	63.4
羽鱈	6.4	13.8	13.0			2.8		5.5		13.1		0.4	2.8
数子・白子	0.6	1.9	13.9				4.1					4.7	0.7
種粕	17.5	44.6	6.1				0.0						
糠	2.3		9.7				0.0	3.9					0.5
その他	40.4	3.0	12.8	17.0		83.4	0.0	12.4	16.4	2.6	70.6	0.9	22.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出典：表4に同じ。

明治一八年までの合計では、約三七パーセントの比率を占めており、近江屋が買付けを多角化させていたことはうかがえる。明治七年（一八七四）の場合は、木曾権三郎、泉屋定之助、板原七兵衛、中堂伝七、栄井弥助、光浦友三郎、新屋佐介、今治治兵衛、田村宗七、伊藤利兵衛、平松九左衛門、中野善蔵、真瀬利兵衛らで、品物も多岐にわたっている。泉屋、中堂以外は、干鰯屋仲間にも荷受問屋にも苗字が見当たらないもので、一時的にでも新しい取引先が拡大していったということであろう。²⁰

明治一一年～明治一八年までの合計では、荷受問屋・商社が中心であったものの、不明の比重も高かった。なかには糠、米などを買付ける場合があった。

表6に買付品目の動向を示した。

干鰯は明治一一、一三年（一八七八、八〇）に高い比重を占めた以外は、一〇パーセント以下であった。明治一一年（一九七八）は買付高が最低の年で、大三輪与一郎からの買付がすべてであった。明治一三年（一八八〇）は東京干鰯問屋喜多村富之助からの買付けであった。ほかの買付けが少ないので、高い数値になっている。メ粕は、明治一〇年（一八七七）と明治一三年（一八八〇）の比重が高いほかは、それほど高い比重は占めなかった。明治一〇年（一八七七）の場合は、荷受問屋の今井勢兵衛から買付けたもので、タルマイなどと一緒に書かれてあるので、北海道産であったようである。

鯡粕は一貫して買付の中心となっている。明治七年（一八七四）は、その他の買付けが多かったのでやや少ないが、それでも二六・四パーセントとなつて相応の比重を維持している。荷受問屋を中心に、仲買からも買い入れて、活発な取引を行っている。羽鯡、数子・白子はこれに付随した買付けで、一定数取引されていた。数子・白子では数子が基本的なもので、白子はごくわずかだった。

種粕は主として明治七年～明治九年の間に買付けられた。比重は高くはならなかったが、明治七年（一八七四）には北海商社から種粕一万一七一六玉を買付けていることが注目される。明治八年（一八七五）は、大一商社から種粕を一九七一玉買付け、明治九年（一八七六）には大阪の杉村正太郎から天満・淡路種粕を一二五〇玉買付けている。

糠も種粕とともに、新たに買われるようになった。明治七年（一八七四）には、赤糠一〇五〇俵を中野善藏・真瀬利兵衛から買付けている。明治九年（一八七六）には、堺の玉谷孫平から二五〇俵ほかに真瀬利兵衛・岡部宗助・由良宗助・島田清兵衛らから八七五俵の買付けを行った。

その他は、明治七年（一八七四）が多くなっているが、大きいものはマシケ・タルマイ・利尻・小樽内・南部などと表記された鯡と鯛の区別がつかないものである。外には米、大豆、麦、菜種、鮭塩引などが買付けられている。米は明治九年（一八七六）に土佐堀の今田仁三郎から豊前米一二五俵を買付け、明治二年（一八七八）に安治川の西村久三郎より豊前米と柳川新米を一一〇九俵、翌一二年に播州米・加賀米合わせて八六〇俵を買付けており、まとまった取引を行っていたことがわかる。安治川は、淀川が大阪湾に入るところで分かれたもので、廻船が入港するルートであるので、西村はそこで西国米を扱っていたのであろう。

最後に、明治一一年～明治一八年までの合計で見ると、鯡粕が六三パーセントと中心で、その他が二二パーセントとなり、干鯛・メ粕で一〇パーセントとこれに続いている。

三 東京干鰯問屋との取引

東京の干鰯問屋との取引は別にもあって、全貌がつかみにくい。明治六年「買附・売附仕切帳」は、帳面の冒頭は白紙が続くが、途中から売附覚や買付覚が写されている。また明治一六年（一八八三）、同一七年の仕切り状が写されている。一部に割印もあり、継続して帳面として使用しようとした様子があるが、数通分でやめている。全体に中途半端な感じの帳面で、全貌を示しているとはいいがたい面があるが、これにより東京の干鰯問屋との取引の状況をうかがうことができるので紹介したい。「買附・売附仕切帳」には、まずつぎのような記載がある。

売附覚

本場新引越物

千里舟分

(網印省略) 百六拾俵

外印口々

同舟分

(網印省略) 四拾九俵

式手板メ 式百九俵

押込

俵成七拾三匁がへ

代

(中略)

かしま入梅引砂卷
(網印省略) 百貳拾俵
同 八拾匁がへ

合 千九百卅貳俵

千里舟分

(朱巻)

「此売附分

仕切之節金三円五十銭

右之通出情売付仕候、已上、

酉十二月十二日

田中市兵衛

喜多村富之助殿

これは、近江屋田中市兵衛が、東京干鯛問屋喜多村富之助に売附額を報告しているものである。酉年は、明治六年(一八七三)が該当するので、ここでは明治六年一二月と理解したい。年末の仕切になると思われるが、干鯛一九三二俵を販売したことを報告している。「本場新引越物」とは房総半島南部の本場と称された漁場で、新たに網で引いたものということの意味する、越物の意味はわからないが、越長などと鯛の状況を表現するので、これに関連したものであろう。「かしま入梅引砂卷」とは鹿島灘で梅雨の時期にとれた鯛で、砂がついているというほどの意味で、商品の性格を現したものである。網印とその説明があり、俵数があつて「押込 俵成七拾三匁がえ」とあるので、一俵平均銀七三匁で売れたということであろう。

明治五年「干鯛買日記」では、明治六年(一八七三)に喜多村から近江屋が購入した干鯛は鹿島秋引三〇〇俵であ

表7 東京問屋との売附・買付・仕切

年月日	相手	脇付	売附		買附		仕切		
			品目	俵数	品目	俵数	品目	俵数	代金(円)
明治6年12月12日	喜多村富之助	青木様分	干鰯	1932	糠 糠	500 1000	干鰯	975	1034.72
明治6年12月12日	喜多村富之助		干鰯	941					
明治6年12月12日	奥三郎兵衛								
明治7年1月5日	喜多村富之助	青木様分	干鰯	407					
明治7年3月12日	喜多村富之助		干鰯	113					
明治7年7月19日	喜多村富之助	青木様分	干鰯	621					
明治7年9月30日	喜多村富之助	青木様分	干鰯	344					
明治16年7月4日	喜多村富之助	青木様分	干鰯	134					
明治16年7月4日	喜多村富之助		干鰯	496					
明治16年7月10日	喜多村富之助								
明治16年7月28日	喜多村富之助	青木勘兵衛殿分	干鰯	401					
明治17年6月15日	喜多村富之助	青木勘兵衛殿分	干鰯	110					
明治17年6月15日	喜多村富之助	青木勘兵衛殿分	干鰯	308					
明治17年7月	喜多村富之助	青木勘兵衛殿分	干鰯	1402					
明治17年7月	喜多村富之助	青木勘兵衛殿			干鰯	426	531.25		
明治17年7月	喜多村富之助				米	85			
記載なし	喜多村富之助				干鰯	308	175.56		
明治17年8月7日	喜多村富之助	青木勘兵衛様分	干鰯	402			843.88		

出典：大阪大学経済史経営史史料室所管、近江屋市兵衛家文書、明治6年1月「買附・売附仕切帳」

り、この帳面の記載と一致しない²²⁾。したがって、この干鰯一九三二俵は、「干鰯買日記」に記載されないで販売されたのであり、この荷物は、喜多村が近江屋市兵衛に販売を委託したものであったと考えられる。

こうした記録を表7に示した。明治六、七年と明治一六、一七年の記事とにわかれている。干鰯についていえば、明治六年（一八七三）には二八七三俵、明治七年（一八七四）には一一四一俵、明治一六年（一八八三）には二一一五俵、明治一七年（一八八四）には二二二一俵を売り上げて報告している。また喜多村の場合、同店の荷物と青木勘兵衛分として近江屋に送った荷物があったことがわかる。近江屋はその区別をつけて、同じ日付で二通の売附覚を送っている。これらの干鰯は、表4でもわかるようにいずれも「干鰯買日記」には記載がない。いっぽう、買附覚はつきのような内容であった²³⁾。

買附覚

赤巻糠別改上々
(網印省略) 五百俵

目方十七貫匁

壹俵貳分がへ

右之通出情買付申上候、以上、

西十二月十二日

田中市兵衛

奥三郎兵衛殿

これは奥三郎兵衛にたいして、近江屋が赤巻糠五〇〇俵を買付けたことを報告したものである。これについては近江屋の「干鯛買日記」の明治六年八月三〇日に真瀬利兵衛から赤糠二五〇俵と同年一月二〇日に柴屋善藏から赤糠五〇〇俵を買付けている記事がある。⁽²⁴⁾柴屋からの買付けがこれに対応している。しかし明治七年(一八七四)一月五日に喜多村富之助にたいして糠一〇〇〇俵を買付けたことを報告したのものには、対応する買付けが確認できない。同年は二月二三日に中野善藏と真瀬利兵衛から合計一〇五〇俵の赤糠を買付けているが、前後している。糠は東京では、馬の飼料や近郊の畑方農村での肥料として使われ、堺に下り荷の間屋があつて集荷されていた。⁽²⁵⁾いずれにせよ近江屋は東京の注文に応じて、糠などを買付ける商売も試みていたことがわかる。

仕切りであるが、明治一六年(一八八三)七月に干鯛九七五俵、明治一七年(一八八四)では干鯛一一三六俵、米八五俵分の仕切りが残されている。⁽²⁶⁾売附覚で報告された、売り上げの一部が支払われていたのであろう。明治一六年(一八八三)を例にとると、

代メ

千三拾四円七拾貳錢

六拾貳円八錢三り

仲買取口せん

六拾三円三拾七銭五り
風走舟運賃

拾壹円七拾銭
瀬取賃

九円七十五銭
取上蔵入仲仕賃

代メ

八百八拾七円八拾壹銭二り

とあり、売り上げ代金のメの後に、仲買口銭、運賃、瀬取賃、仲仕賃を書き上げ、これを差し引いて支払いを行ってることがわかる。⁽²⁷⁾ 仲買口銭は、代金にたいして六パーセント余となっている。⁽²⁸⁾ この場合、近江屋は仲買口銭とはいっているものの荷受問屋として、委託販売を行っていた。近江屋は、喜多村から送られてきた干鯛を自分荷物として買い取った場合は「干鯛買日記」に記帳し、委託荷物（送荷）として、大阪の仲買に売った場合は、別の帳簿に記載して、売附覚を出して喜多村に報告し、口銭を取得したのである。

まとめ

以上、「干鯛買日記」を中心に、慶応三年（一八六七）～明治一八年（一八八五）までの近江屋市兵衛家の肥料の仕入れ動向を見てきた。明治一一年以降は、帳簿の年度が不明確であり、記載も少なくなるので、どこまで実態を示しているか不安な面もあるが、一応の状況は明らかになった。

近江屋の買付けは明治五、六年にかけて順調に拡大し、総買付銀高が明治五年には四万〇一〇貫目にまでのぼり、この時期がピークとなった。同一〇年までは、ピークからやや後退しつつ、これが維持されていた。その後は年度の切

り目に問題があるものの、買付けは減少していったと見られる。明治一〇年（一八七七）に第四十二銀行が創立されて、田中市兵衛はその頭取として頭角を現した。そのため肥料商経営への関心が薄れたという面もあったのかもしれない。

「干鯛買日記」は仲買商として、肥料の買付けを記録したものであるが、買付の中心は松前問屋（その後荷受商）で、ほかに新しくできた商社が中心だった。これに干鯛屋仲間（後仲買商）が加わっていたが、仲買商の比重は低下する傾向にあった。松前問屋からの仕入れは入札であるので、特定の商人と結びつくことはなかった。明治初年は東京の干鯛問屋から干鯛・メ粕の仕入れが途絶えていたので、宇和島産の鯛メ粕粕の買付けが行われ、宇和島問屋との取引も行われた。またこれまで行われなかった種粕や糠の買付けが大規模に行われた。これらは継続はしなかったが、単年度では相当数になった年もあった。糠などは一部は、東京干鯛問屋の注文に応えたものであった。幕末期には泉州堺と江戸に糠問屋があり下り荷の取次にあたっていた。明治以降は、東京の干鯛問屋もこれに参入しようとしていたことがわかる。

幕末維新の変動期において近江屋市兵衛の肥料買付けは、急速に拡大していったことはうかがうことができる。これにともない、新しい取引相手と商品も開拓されていったが、これについて肥料販売の展開はどのようなものだったか、つぎの課題となる。

注

- (1) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(二) (『東洋大学文学部紀要』六八集史学科篇四〇号、二〇一五年)。
- (2) 『大阪穀肥料市場沿革史』(大阪府肥料卸商業組合、一九四一年) 五六～五八頁。
- (3) 『北海産荷受問屋組合沿革史』(黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』六輯、大阪商科大学経済研究所、一九四〇年) 一二二頁。宮本又次「田中市兵衛」(同編『上方の研究』清文堂出版、四卷、一九七六年) 六一六～六三二頁。なおここでは「明治元年に父祖の業をついで商売をはじめ」とあるが、安政二年の誤りであることは、前論文で指摘した。
- (4) 『東洋大学井上円了記念博物館所蔵・近江屋市兵衛家文書四五番、慶応三年正月「干鰯買日記」』および、同五〇番、明治五年正月「干鰯買日記」による。以下、東洋大学・近江屋市兵衛家文書何番と略記する。
- (5) 幣制の混乱については、作道洋太郎『近世封建社会の貨幣金融構造』(塙書房、一九七一年) 五六三～五六六頁。
- (6) 東洋大学・近江屋市兵衛家文書四五番。
- (7) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(二) (前掲)。
- (8) 大阪水産物流通史研究会『資料 大阪水産物流通史』(三一書房、一九七一年) 八七～八八頁。
- (9) 国文学研究資料館所管・祭魚洞文庫・大阪干鰯商仲間記録六六番、文久元年六月「記録名前帳」、明治六年は「大阪穀肥料市場沿革史」(前掲) 五六～五八頁。
- (10) 大阪水産物流通史研究会『資料 大阪水産物流通史』(前掲) 八八頁。
- (11) 高瀬保「加賀藩海運史の研究」(雄山閣、一九七九年) 四一八～四一九頁。谷本雅之「一九世紀、新川木綿の発展と衰退」(富山大学日本海経済研究所『研究年報』一六卷、一九九一年)。
- (12) 『北海産荷受問屋組合沿革史』(前掲) 一二五頁。木屋市郎兵衛は前注「加賀藩海運史の研究」では木屋市兵衛とも見えるので、市兵衛、市郎兵衛が襲名されたようである。
- (13) 中西聡「近世・近代日本の市場構造」(東京大学出版会、一九九八年) 一三五頁。
- (14) 堺肥料兼問屋仲買商組合「商業沿革調査書」(大阪市立中之島図書館所管)。
- (15) 大阪大学経済史経営史資料室所管・田中市兵衛家文書、明治六年九月「干鰯買日記」。以下、大阪大学・田中市兵衛家文書と略称する。
- (16) 石原佳子「杉村家文書―『久子日記』をめぐる』(『大阪の歴史』増刊号、一九九八年)、荒木康代「商家経営における主婦(女主人)と女中の関係についての考察」(関西学院大学『社会学部紀要』一〇七号、二〇〇九年)。石原によれば、杉村の次代正太郎と五代友厚の娘久子の結婚の媒酌は田中市兵衛が務め

たという。

(18) 拙稿「大坂干鯛屋近江屋市兵衛の経営」(二)(前掲)。

(19) 西野嘉右衛門『阿波藍治革史』(西野家蔵版、一九四〇年)三三二頁。

(20) 和泉屋は仲買にも松前問屋にも見られた屋号で、明治になるとそのまま、泉谷という苗字に姓を定めている。中堂は明治一一年五月の北海道産物問屋蔵支配人名書に「中堂卯兵衛」とある(「北海道産物問屋組合治革史」前掲、一二六頁)。

(21) 大阪大学・田中市兵衛家文書、明治六年「買附・売附仕切帳」。

(22) 東洋大学・近江屋市兵衛家文書、五〇番。

(23) 大阪大学・田中市兵衛家文書、明治六年「買附・売附仕切帳」。

(24) 東洋大学・近江屋市兵衛家文書、五〇番

(25) 拙稿「近世後期主穀生産地域の肥料商と流通」(東洋大学東洋

学研究所『東洋学研究』四七号、一九一〇年)。

(26) 大阪大学・田中市兵衛家文書、明治六年「買附・売附仕切帳」。

(27) 同前。

(28) 例えば明治五年の第一北海道産物商社の規則では、仕切金高の六分が口銭と定められている(「北海道産物問屋組合治革史」前掲、一一六―一一七頁)。

付記

本論文は二〇一四―二〇一六年文部科学省科学研究費補助・

「近世の肥料商と農業経営」(課題番号二三五二〇八三二)の研究の一部である。論文作成にあたって、東洋大学井上円了記念博物館、大阪大学経済学部経済史経営史資料室、大阪市史編集所、国文学研究資料館など関係機関の皆様のご協力をえた。記して深謝の意を表す次第です。